

アンコール・ワットについて

岩 本 裕

昭和五十七年十一月、カンボジア(現在カンブヂアKampuchea という)の現在のヘンサムリン政権が十二年ぶりに西側に門戸を開き、観光団を受け入れるとのことで、日本電波ニュース社の協力で西武百貨店旅行事業部が主催して「アンコール遺跡と文明探求の旅」の旅行団が編成された。筆者は現在『ラーマ・ヤナ』の和訳をすすめている者として、予てからアンコール・ワットにある「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫を見たいと念願していた。と言うのは、アンコール・ワットの研究書あるいは旅行

記・案内書の類には、建設者「スールヤヴァルマン二世の像」の浮彫とか、「乳海攪拌の神話」の浮彫などの写真によく見られたけれども、「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫、とくに「ハヌマンの肩に乗って戦うラーマの像」とか「十頭二十手の魔王ラーヴァナの戦う姿」などの浮彫の写真はほとんど見られず、たとい見られても不鮮明なものであったからである。また、インド文化がアジアの諸国とくに東南アジアの諸民族の間にいかなる影響を及ぼしたかを研究テーマとしている者にとっては、アンコール・ワットにはいくつかの疑問があり、その解明の手がかりを得るためにも、一度親しく視察しておき

たかったのである。そこで、旅行団の募集があると知って、早速に参加を申し入れたのであった。

十一月十七日朝、成田空港に集合した。講師はわが国で唯一人のカンボジア史の専門家である上智大学教授石沢良昭博士で、当日集合した人は添乗員を含めて二十六名(うち女性七名)であった。筆者は一番の年長ということで団長に指名されたが、万事石沢博士に頼ってばかりいたというのが実状である。

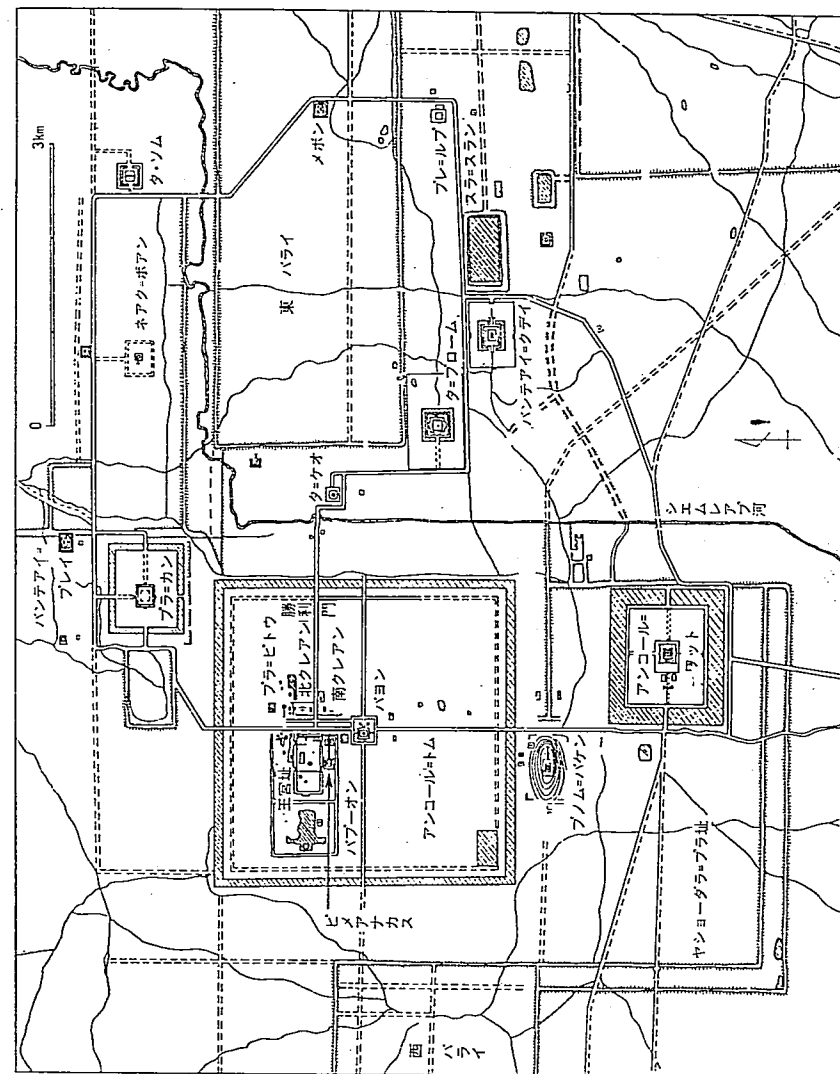
十一月十七日の夜はバンコクの Rama Tower Hotel に一泊。翌十八日朝、エア・フランスでバンコクからヴェトナムのホーチミン市(以前のサイゴン)に飛んだ。バンコクからはNHKをはじめフジ・アサヒ・TBSテレビなどの特派員が同行し、総勢三十一名の大旅行団となった。ホーチミン市の Hotel Cuu Long (Cuu Long Majestic Hotel) に一泊。翌十九日午前九時にホテルを出発し、チャーターしたカンボジア航空の双発機(アントノフ四二四)で離陸したのは十一時二十分、正午ごろにカンブヂアの首都プノンペンに到着した。当方は観光旅行団であるが、先方は友好親善使節団の待遇で、外務省の宣伝課長

サム・ベン Sam Pheng 氏(四十三歳、もと教員)の出迎えを受け、団長として歓迎の花束を受けた。生まれて初めての経験であったが、団長の仕事とはこういうことであると覚悟した次第である。石沢氏と一緒に外務省差しまわしの車に乗せてもらい、宿舎の迎賓館 Hotel Cham-cannon に向かう。午後二時から外務省の新聞局長チュム・ブンロン Chum Bun Rong 氏(三十二歳、プノンペン大学英文科出身)も出席して昼食。団長として挨拶する。石沢氏がフランス語に通訳。三時から車を連ねて、まずポルポト政権時代の収容所跡に案内される。残酷な内戦の結果に戦慄する。そのあと、国立美術館を見学、五時に出て隣接する美術品店で『ラーマ・ヤナ』関係の浮彫の拓本を購入する。いずれの寺院の浮彫の拓本であるか不明。あと、プノンペンの丘にまわり、六時半ごろ宿舎に帰る。七時から夕食。新聞局長も出席。このときも、乾杯の音頭をとる。なお、この席には日本電波ニュース社のプノンペン駐在員の熊谷均氏と純子夫人が同席する。新婚六カ月の若夫婦で、二人で色々と新鮮な見聞(プノンペンの生活、官吏の待遇・特典など)を話してくれる。

十一月二十日(土)、いよいよアンコール=ワットを訪れる日である。午前七時にホテルを出て、昨日と同じ飛行機をチャーターして、八時二十分離陸、九時過シエムレアプ飛行場着。直ちに Grand Hotel に直行、部屋割りのあと十時に出発、バヨンに直行する。途中、アンコール=ワットの外濠を南から西側(アンコール=ワットの正面)にまわり、アンコール=ワットの全貌を遠望する。十二時までバヨン視察、破損の激しいのに驚く。いろいろと細部にわたって検討している間に一行からはぐれ、西北隅のところで道を迷い、暗闇の中をうろつく。ホテルに帰って昼食をし、午後二時半に出発して、午前に通った道を進み約六キロ、アンコール=ワットの西門前に到着する。一刻も早く「ランカー島の戦闘」の場面の浮彫の前に立ちたかったが、はやる心をおさえて一行のあとにつづく。第一回廊の入口で、一行は石沢博士の案内で右折してゆくと離れ、左折して問題の浮彫の前に立つ。チラッと見た時計は午後三時二十分だった。遂に来た、いうにいわれぬ感懐に一瞬つまれたが、それに浸っている暇はない。幸に、同行していた日本電波ニユ

ース社のプロデューサー橋田信介氏が助けてくださり、一眼レフで細部を撮っていただく。自分はオートフォーカスのカメラで少し離れた位置から撮影した。さきに記したラーマとラーヴァナの姿は自分の撮影では不鮮明に終わったが、幸に橋田氏の好意に甘えたフィルムに鮮明な影像があり、永年の渴をいやすことができた。そのあと、一行より約三十分おくれで第一回廊を一周し、かねてから疑問をもっていた点のみに注目して歩いた。そのために、中央の高塔を視察する時間がなかった。五時近くアンコール=ワットを背景にして蓮池の前で一行の記念撮影をし、五時半ごろ帰路についた。ホテルで夕食、シエムレアプ州委員会の委員の一人が出席。その席上翌日視察の予定であったバンテアイ=クダイ、バプーオン、ピメアナカスへ行くことにカンプチア側から難色があり、結局予定の変更を余儀なくされる。

十一月二十一日、午前中はアンコール保存委員会事務所見学、アンコール文化の遺物である仏像とか碑文などを見る。午後は西バライを視察、現在は灌漑用水の供給池となっている人造湖の規模の大きさに驚嘆する。その



アンコール周辺図

あと、飛行場に向かい、プノンペンに帰る。ロシア人の飛行士が気を利かしてくれて、機はアンコール=ワットの上を二回旋回し、また雨期あけの溢水したトンレ=サップ湖の上を横断して飛ぶ。溢水した湖の大きく広いのを改めて知った。プノンペン到着後、直ちに旧王宮に直行する。王宮とならんで、旧王家の菩提寺院「銀の寺」(フランス語で Pagode d'argent と云う)があり、その周囲の壁に『ラーマヤナ』の壁画があった。バンコクのワット=プラケオを真似た形式であるが、どの絵もその下半分の剝離が甚しく場面の同定は不可能だった。当日はたまたま日曜日だったので、王宮前の広場には黒山の人出で、象に乗ったりして興じていた。子どもの多いのに驚く。美人はいないかと探しまわり、漸く中国人系の丸ポチャの女性を見つけたに過ぎなかった。

十一月二十二日、一行は午前中はメコン河における独自の漁法の見学、午後はマス=グレイヴやマーケットの見物に出かけたが、自分は疲労を理由にホテルに引籠り、前日視察したアンコール=ワットに関するメモの整理をする。あとから聞くと、ジャーナリズム関係の人々

あと、飛行場に向かい、プノンペンに帰る。ロシア人の飛行士が気を利かしてくれて、機はアンコール=ワットの上を二回旋回し、また雨期あけの溢水したトンレ=サップ湖の上を横断して飛ぶ。溢水した湖の大きく広いのを改めて知った。プノンペン到着後、直ちに旧王宮に直行する。王宮とならんで、旧王家の菩提寺院「銀の寺」(フランス語で Pagode d'argent と云う)があり、その周囲の壁に『ラーマヤナ』の壁画があった。バンコクのワット=プラケオを真似た形式であるが、どの絵もその下半分の剝離が甚しく場面の同定は不可能だった。当日はたまたま日曜日だったので、王宮前の広場には黒山の人出で、象に乗ったりして興じていた。子どもの多いのに驚く。美人はいないかと探しまわり、漸く中国人系の丸ポチャの女性を見つけたに過ぎなかった。

十一月二十二日、一行は午前中はメコン河における独自の漁法の見学、午後はマス=グレイヴやマーケットの見物に出かけたが、自分は疲労を理由にホテルに引籠り、前日視察したアンコール=ワットに関するメモの整理をする。あとから聞くと、ジャーナリズム関係の人々

は新聞局長の案内で市内を視察したとのこと、切齒扼腕したが後の祭りである。夕食後、国立劇場のこけら落しに案内される。石沢氏・新聞局長・劇場の支配人とならんで、最前列の中央に椅子を与えられる。上演された踊りは六種、まず第一は影絵(バン=トム ban thom 原意は「大きな皮革」)によって、『ラーマヤナ』のランカー島の戦闘の場面が上演される。演者がスクリーンの前後を走りまわるという相当に激しい演出である。第二はアプサラ(天女)の踊り、そして第三の演目はラーマとラクシユマナの二人が森で小鹿を追う場面で、いずれも可憐な踊りで、心のなごむ舞台であった。第四の演目は、一転して、ラーマ伝説を援用して現代の政治状況を諷刺した演出である。正面に、一九七五年四月から一九七九年一月まで五年近くプノンペンの無人化・鎖国・虐殺という不可解な事態をひきおこした民主カンボジアの指導者ポルポトのみすばらしい姿が、薄明りの脚光の中に浮び上っており、舞台前面には猿の姿をした数名の者が建設工事をしている。これはハヌマンの指揮の下に架橋工事をする『ラーマヤナ』の一場面を髣髴させるものであ

ものといえよう。それにしても、その六種の演目の中で三種が『ラーマヤナ』またはそれに關聯のあるものであったことは、『ラーマヤナ』を訳している筆者には非常に印象深いものであった。

舞台が終ると、新聞局長の先導で石沢氏と一緒に舞台上に導かれる。花束を贈られたが、その花束を舞台の中央にいた可憐な主演女優に贈ったあと、歌が終るまで舞台上で観客席に向かったまま拍手をつづける。九時過終了。

翌二十三日はカンボジアから出発する日である。朝八時半に外務省に赴き、外務大臣フン=セン Hun Sen 氏(現首相)と会う。年齢は三十一歳とか、どちらかと言えば闘士らしい風貌であった。現政権発行の種々のパンフレットを渡され、一行を前にして永々と外交問題を喋りつづける。特に中国とタイに対する口調に厳しいものがあった。九時四十五分ごろ終り、直ちに空港に向かい、十一時過出発。十二時過にホウチミン市に到着。その地に二泊して、週一回周航のエア=フランスで再びバンコクに出て、十一月二十六日午後六時ごろに成田着。旅行団

を解散する。

永年の念願であったアンコール・ワット詣ではこうして終わったが、筆者の受けた数々の印象はいずれも強烈であった。それだけに、問題の整理に時間を要したことは事実である。また、いくつかの謎を自分なりに解決したと思うし、さらに疑問の深まった点もいくつか生じた。従って、今の気持としては再度アンコール・ワットを訪れたいと願っているものの、その願いがかなえられるか甚だ疑問である。われわれの一行に夫人と一緒に参加された写真家の横山宗一郎氏が、昭和五十八年二月上旬に新宿のペンタックス・フォーラムで「浄土残景」と題して、旅行の際に撮影された写真を公表された。素晴らしいの一語に尽きる作品の数々であった。二月九日にそれを拝見したときに横山氏が

「カンボジアに関する書物はどれを見ても、内容はみな同じですね」

と言われた。筆者は

「カンボジアに関する研究は、今日までフランス学界の独壇場であり、わが国における唯一人の専門家の石

沢博士はその学統を継承していられるのですから、今のところ仕方ないことでしょう」

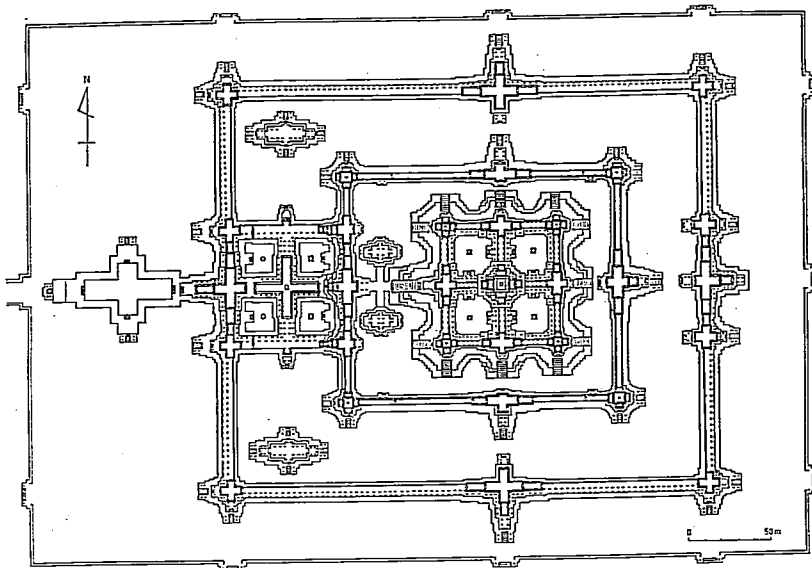
と答えるほかはなかった。しかし、この横山氏の御意見は正に筆者が永年疑問として温めていた諸問題を総括的に指摘したものであった。筆者は敢えて従来の学説に異論を唱えるつもりはないが、現在主として東南アジアにおけるインド文化の影響に広く関心を持っている、インド学を専攻する一人の学究として、問題点を指摘し、それに対し筆者なりの解釈を提示することは許されるであろう。そして、それを次の段階への展開の足がためにしたいと思う。

二

アンコール・ワット Angkor Wat は人類が曾て建造した最大の宗教建築であり、その壮大なこととその豪華さが渾然一体をなして、他にその類例を見ないと言っても言い過ぎではないであろう。われわれはまずその全体の建築構造を見ることにしよう。

シエムレアプのホテルから車で数分間北上すると、ア

アンコール・ワットについて



アンコール・ワット

ンコール・ワットの南側の濠につきあたる。左折して、アンコール・ワットを右側に見ながら、さらに右折して約六百メートル余り、アンコール・ワットの西門に到着する。これがアンコール・ワットの正門である。一段と高い参道の入口の両側に一對の唐獅子の像があり、われわれを出迎えてくれる。見れば、アンコール・ワットは幅広い濠（約二百メートル）に囲まれて、池に浮かぶ城郭をしのばせる。だが、城郭というには全体の結構は余りにも壮麗であり、またその一部を凝視すると余りにも繊細であり、その調和と綜合の美しさは表現する言葉に苦しみほである。濠の外側の長さは東西が千五百メートル、南北が千三百メートルで、全体は東西に長い矩形をなしている。なお、東参道は土塁のままで舗装されておらず、南北には濠を渡る参道はない。西参道の両側には、積石の上にナーガの欄干があり、ナーガの頭の高さは約四メートルである。濠の内側と第一劃の周壁との間に、約三十メートル幅の通路がある。

第一劃の周壁はラテライトと砂岩づくりで、その長さは東西が一千メートル、南北が八百十五メートルであ

る。西の入口は十字形のゴーブラ（楼門）で、三つの楼閣から成り、それぞれの頂には塔があり、二百メートル以上に及ぶ回廊で結ばれている。そして、両端には象や車の通る門がある。中央塔の正門の手前から東向きに見ると、正門の入り口を通してアンコール・ワットの中央の高さ六十五メートルの塔が遠望される。

第一劃の塔門を通り抜けると、長さ約三百五十メートルの舗装された参道がつづく。幅は約十メートル、左右の地面から一メートル六十ほど高い。この参道の両側にもナーガの胸牆がある。参道の中ほどの両側に、経蔵の跡と見なされる建物がある。第二劃の低い石壁の手前のところの両側に、聖池がある。向かって左側は水を湛えていたが、右側のは草茫々であった。

第二劃は低い石造の壁で囲まれ、東西は約三百四十メートル、南北は約二百七十メートルである。第二劃は第一劃の地面より約二メートル高い土壇から成り、この土壇は西側で幅が八十メートルであり、他の三方向では四十メートルである。参道が第二劃に入ると、直ぐに第一回廊の入口の階段に通ずる高さ二メートルほどの十字形

の大きなテラスがあり、第二劃の地面に降りる幅二メートルの階段が参道の両側にある。このテラスの奥に塔門があり、種々の浮彫のある第一回廊はここから左右に分かれる。

第一回廊が囲む第一テラスは東西二百十五メートル・南北百八十七メートルで、第二劃の地面より三メートル五十高くなっている。四十五メートル四方の天井のある中庭があつて第二テラスにつづくが、この中庭には三本の廊下があり、第一と第二の両テラスの三つの入口をつないでいる。中央の廊下の半ばに左右に通路の腕が出て左右の廊下につながり、中庭は四つに区分されている。腕の部分の両端に第一テラスに降りる階段がある。第一テラスの西の入口の両側にそれぞれ小祠堂がある。第二テラスの大きさは東西百十五メートル・南北百メートルで、第一テラスより七メートル高くなっている。第二テラスの周囲の牆壁の四隅には塔があるが、著しく破損している。東・南・北の三面の回廊は、外側には独自なくり形のある縦格子をはめた盲窓となっており、内側には奇妙で複雑な髪形の天女の浮彫が数多く見られる。な

お、東・南・北側の中央にそれぞれ出口があり、四隅の塔にはそれぞれ二つの出口があつて、第一テラスに降りることができる。

第三テラスは七十五メートル四方で、第二テラスよりも十三メートル高い。四方の中央に一つ、四隅に二つの急な階段があつて、下の第二テラスに降りられるようになっている。西側正面中央の階段の数は三十八であり、その傾斜角度は四十五度の急勾配になっている。四隅には塔が聳えているが、これらの塔は第二テラスの四隅のものより大きく、しかも現在の保存状態は比較的に良好である。中央塔の歩廊は第三テラスの床から数メートル高い。中央塔はアンコール・ワットの他のいずれの塔よりも大きく、四十二メートルの高さがあり、その頂は周辺の土地より六十五メートルの高さに聳えているという。

アンコール・ワットについて
以上、アンコール・ワットの建設構造を比較的詳細に記述したのは、その特異な姿を明確に把握して頂きたいがためである。今日、アンコール遺跡の諸建造物をその写真と平面図で見たときに知られることと、アンコール・ワットのそれとは全く異なるからである。その点につ

いては後で触れるとして、ここでアンコール・ワットの第一回廊の内壁に全長七百六十メートルにわたって描かれる浮彫について記述する必要がある。まず、今日一般に行なわれている見物の進行方向に従つて、西側正面の塔門から右に道をとることにしよう。これは時計の針の反対にまわることで、インドではブラサヴァ *Prasava* といい、葬式の際の歩き方で、近くは昭和五十九年十一月三日にガンジー首相の火葬の行なわれたとき、テレビの画面にはつきりと見られた。それはそれとして、入口の塔門から右に折れると、

西回廊南側（WS）。長さ五十メートルに及ぶ浮彫が並び、そのテーマはインドの叙事詩『マハーバーラタ』のテーマであるカウラヴァ軍とバーンダヴァ軍の大戦争の場面である。十八日のあいだクル・クシェートラ（クル平原）に繰りひろげられた両軍の戦いは、激戦の結果カウラヴァ軍が潰滅し、バーンダヴァ軍の勝利に終るのであるが、この壁面に見られるバーンダヴァ軍のアルジュナ王子が戦車の上で勝ち誇っている姿は極めて印象的である。何故なれば、この戦いに際しバーガヴァタ派の

教祖であるクリシュナ Kṛṣṇa がアルジュナに語った烈烈の言葉が、のちにヒンドゥー教の經典として今日もなお数億の教徒に無限の福音をもたらすという『バガヴァッド・ギーター』Bhagavad-gītāの中に凝集されているからであり、しかもクリシュナは実にヴィシュヌ神の権化であるからである。アンコール・ワットのこの壁面に

関して最も重要な宗教的意義がこの点にあることを忘れてはならない。しかも、壁画面を詳しく検討すると、カウラヴァ軍は壁面の左側から進軍しており、それが右から進軍してくるパーンダヴァ軍に敗れるという構図は、この壁面のアンコール・ワット浮彫に占める位置を考える上で、極めて重要な示唆を与えると考えられる。次に、南回廊西側(SW)。全長九十八メートルに及ぶ浮彫は、アンコール・ワットの建設者スールヤヴァルマン Suryavarman 二世の偉業を讃美するものであって、政庁において玉座に悠然と坐って政務を見る王の姿や威風堂々と近衛兵を従って閱兵する王の姿、さらにはクメルの將軍に率いられたルヴォ(Lovo)の軍勢、タイ族の傭兵など、極めて生々と描かれている。次に、

南回廊東側(SE)。全長六十六メートルのこの壁面は、上段が極楽で下段が地獄の様相を描き、死後における人間審判の図とされる。棍棒を振って審判をするヤマ「閻魔」の姿があり、地獄に突き落とされる罪人の姿が克明に描かれている。

東回廊南側(ES)。アンコール・ワットの案内書・解説書に必ずと言ってよいほどに見られる「乳海攪拌」の図である。五十メートルの壁面に見られる浮彫はインド神話に有名なサムドラ・マタナ samudra-mathana を題材とし、その均整のとれた躍動美は他に類例を見ない。中央にヴィシュヌ神が亀の背の上にマンダラ山をのせて攪拌棒とし、毒蛇ヴァースキを大綱としてそれをまわしている。蛇の頭の部分を八十八名のアスラがかかえ、尾の方を八十五名の神がかかえて、お互いに引き合っている。マンダラ山をまわし、乳海を攪拌するところを描いている。不思議なことに、神々の最後尾に近く『ラーマヤナ』の英雄である猿王ハヌマンの姿が見えることであり、これがこの壁面の浮彫が単に乳海攪拌の神話を描いたものでないことを示唆するかと思われる。次に、

東回廊北側(EN)。ヴィシュヌ神とアスラ軍との戦いを描く。中央にガルダ鳥(迦楼羅)にまたがって、ムラ・ニスンダ・ハヤ・グリーヴァ・パンチャ・ナンダの四アスラを倒す神話に基づく。怪獣のひく戦車に乗り突進するアスラ軍、大きな鳥に乗って矢を放つアスラ軍など、神話世界の雰囲気荒々しく伝えている。次に、

北回廊東側(NE)。『マハーバータ』の補遺である『ハリ・ヴァンシャ』Harivaṃśa (ハリすなわち「ヴィシュヌ神の家系」)の一節「バーナとの戦い」をテーマとする。獅子を先導とし、戦車に乗って二十二本の手にそれぞれ棍棒を持ち、それを振り廻しながら奮戦するアスラ王バーナ、それを迎え撃つクリシュナすなわちヴィシュヌ神の権化、それに味方してアスラ討伐に象に乗って進む神などが描かれる。なお、この浮彫(NE)と前項のENの二壁面は、美術史的に見て、かなり後代の作であるとされる。次に、

北回廊西側(NW)。同じく『ハリ・ヴァンシャ』のヒピソードに由来し、クリシュナとカーラネーミの争いの神話を描く。神とアスラ軍の戦いを描く点で、NEなら

びにENと軌を一にするが、手法に若干の差があり、特にNEのそれとの間が甚しい。製作年代の相違によるか、製作者の出自が異なるか、いま簡単に論ずることはできないが、ただこの壁面にはヒンドゥー教の数多くの神々の姿が見られる点に興味深いものがある。次に、西回廊北側(WN)。ランカー島の戦闘の場面で、『ラーマヤナ』に題材を仰ぎ、全長五十メートルの壁面に見られるハヌマンの肩に乗って戦うラーマの姿とか十頭二十手の魔王ラーヴァナの戦う姿とかは、同じテーマを描くバンコクのワット・プラケオの壁画やワット・ポーの浮彫に比べて、真に迫る力強さを感じさせる。

なお、西側の両端にある楼門にも、『ラーマヤナ』に由来するシーンの浮彫があるが、そこに見られる人物像は約一世紀おくれで建立されたアンコール・トムのパヨンのそれに類似しており、また手法にもアンコール・ワットの壁面とは相違が見られる。

三

アンコール・ワットは前述のように十二世紀の前半に

スールヤヴァルマン二世ならびにその直接の後継者によって建立されたのであるが、その謎を解くには、まず、そこに至るまでのカンボジアの歴史の概要を知る必要がある。

さて、カンボジアはクメル人の国であるが、今日に知られる最古の国家は中国史料に見られる真臘である。真臘の名の由来については、いまだ適切な説明が与えられていないのは遺憾であるが、中国人は十三世紀の周達觀の『真臘風土記』に至るまで常にクメルおよびカンボジアに対して、この名を用いている。

ところで、カンボジアの歴史は九世紀から十五世紀前半に至るまでのアンコール時代を中心に、美術史家のいう先アンコール期(六・七世紀)と、南進するタイ族の勢力に圧迫されて都城アンコールを放棄したのちの後アンコール期に分かたれる。後アンコール期(一四三二年以後)は今しばらく措くとして、先アンコール期については若干の王名とその業績が碑文資料からも知られるが、注目すべき宗教史上の事実は初期の王でメコン Mekong 河中流地域のバサック Basak 地方にあったとされる首

都シュレーシュタ・プラ Sreṣṭhapura の建設者シュレーシュタヴァルマン Sreṣṭhavarman (六世紀)が、王都の近くの山にバドレーシュヴァラ Bhadravarā というリంగా Linga を祀り、そのためにこの山はリంగా・パルヴァタ Lingaparvata 「リンガの山」と呼ばれたということである。この所伝は、既にこの頃に、この地方にシヴァ神の信仰が行なわれていたことを示す。また、『隋書』八二(列伝四二)真臘の条には、この国の習俗が明らかにインド起源のものであることを示して、この国の文化の基盤がインド文化であったことを如実に物語っている。七世紀の終りに、ジャヤヴァルマン Jayavarman 一世の治世(ほぼ六五七―六八二)には、カンボジアの勢力はバサック地方からシャム湾沿岸地域にまで伸びていたことが知られる。

そのあと、カンボジアは分裂に見舞われるのであり、中国史料に依れば八世紀を通じて中部メコン地域とダンレク山脈北方の陸真臘と、ほぼ現在のカンボジア全域とメコン・デルタ地帯に勢力を持った水真臘とに分裂していたことが知られる。しかも、当時いくつかの小王国あ

るいは小勢力に分かれていた水真臘は、八世紀半ばに中部ジャワを中心に擡頭したシャイレンドラ Sailendra 王国の勢力下に併合されていた。このように分裂していたカンボジアを統一したのは、八〇〇年ごろにジャワから帰国したカンボジアの貴公子であった。その間の事情は明らかではないが、ジャワに亡命していたか捕虜となっていたと思われる。この人は曾てのカンボジアの王家と血のつながりがあったとされ、八〇二年に即位したジャヤヴァルマン二世である。その治世は九世紀の前半の大半にわたるが、数度にわたって都を変えたことは国内平定に努力したことを示唆する。しかし、彼はカンボジアの歴史において、アンコール王国の精神的な支柱と経済的な基盤に大きな業績を残した。その第一は、爾後十五世紀に至るまでアンコール王国の国家宗教ともいへき神王 devarāja (クメル語 Kamraten jagat ta raja) 崇拜の基礎を確立したことである。彼はブノム・クレン Phnom Kulen の王に天上の王であるマヘンドラ Mahendra 「偉大な王者」というリングを奉祀して、その地で即位した。このことにより、後にマヘンドラ・パ

ルヴァタと呼ばれたこの丘に祀られるリングは、シャイレンドラ王国の宗主権をたち切った記念としてクメル族の王国の勝利と栄光のシンボルであり、また後にはアンコール王国の靈魂の住処と見なされたのである。碑文の中で、ジャヤヴァルマン二世はしばしばパラメーシュヴァラ Paramēśvara (最高の支配者)と記されるが、この称号はシヴァ神の尊称の一である。こうして、サンスクリット語では「神の王」(インドラ)と理解された deva-
[deva] という格限定複合語は、同格限定複合語として「王なる神」と改竄され、リングで表象されるシヴァ神の呼び名になったことが窺われる。

ジャヤヴァルマン二世のもうひとつの偉業は、ハリハララーヤ Hariharalaya に都を定めたことである。彼はこの地で死んだのであるが、この地は現在アンコール地区の中心であるシエムレップ Siemreap の南東十三キロメートルの地点にあり、アンコール地区の入口にあたる。この地はトンレ・サップ Tonle Sap 湖に近くて魚が豊富であり、しかも前面に広がる広大な水田は適切な灌漑により大きな人口を養うのに十分な食料の供給地で

あった。ジャヤヴァルマン二世がこの土地を都に定めたのはアンコール地区の利点を正しく評価したことを意味する。この王の勢力は確かにトンレ・サップ湖の北の地域を越えなかったけれども、彼は十五世紀前半に及ぶ新しい王国の基礎を築いたのであった。

ジャヤヴァルマン二世の次の次のインドラヴァルマン Indravarman 一世(八七七一八八九)は、即位すると間もなく、都ハリハラ・ラヤの北に巨大な貯水池インドラ・タターカ Indratataka を築き、首都に水を供給する運河組織を完成させた。そして、八八二年には、ピラミッド型段台のバコン Bakon を首都の中央に築き、インドレーシュヴァラ Indrēśvara というリングを設置した。このバコンとインドラ・タターカとは、明らかに神話でシヴァ神の本拠とされるカイラーサ Kailāsa 山とその麓にあるマナサ Manasa 湖とを模倣したものである。そのうち、この形式はアンコール期を通じて大抵の寺院の場合に見られ、カンボジア建造物複合の特色をなしている。

インドラヴァルマンの子ヤシヨーヴァルマン Yaśovarman 一世が八八九年に王位に即位した。この王はアンコ

ール地区の重要性に鑑みて、ハリハラ・ラヤの西北に、一辺四キロメートルの四辺形の新都ヤシヨーダラ・プラ Yasodharapura の建設に着手した。プノム・バケン Phnom Bakheng の丘を都の中心とし、その頂上に「王のリング」ヤシヨーダレーシュヴァラ Yaśodharēśvara を祀った。それと同時に、首都ならびに国土の水利体系を安定させるために、都城の北東に長さ七キロメートル・幅二キロメートルの巨大な貯水池を造り、プノム・クレンから流れ出るシエムレア川の水をひいた。この貯水池はヤシヨーダラ・タターカ Yaśodhara-tataka と命名された。現在、遺跡のこの東バライ Baray のことである。

ヤシヨーヴァルマン一世の治世(八八九―九一〇ころ)のあと、その直系の後継者たちと一族のジャヤヴァルマン四世との間に王国は分裂し混乱したが、九四四年に地方勢力としてバヴァ・プーラ Bhava-pura の王であったラージェーンドラヴァルマン Rajendravarmān 二世がアンコール王国の王位に即き、改めてヤシヨーダラ・プラを首都とし、その復興に着手した。九五二年には、ヤシヨ

ーヴァルマン一世が築いた巨大な貯水池の中央に、「王

のリング」ラージェーンドレーシュヴァラ Rajendresvara を安置した寺院を建立した。これが東メボン Mebon である。ついで、九六一年には、同じ貯水池の南にバドレーシュヴァラ Bhadrēśvara というリングを祀るプレ・ルプ Pre Rup 寺院を建立した。九六八年に王位を継承した息子のジャヤヴァルマン五世の治世(九六八―一〇〇一)には、国内は平穏で、新都の造営が進められたかと思われる。その歿後、王位の継承をめぐる争いが起こった。

九年にわたる内乱の後、一〇一〇年に出自不詳のスールヤヴァルマン Suryavarman 一世がアンコール王国の王位に即き、ヤシヨーダラ・プラに都し、王宮の中にピメアナカス Phimeanakas 寺院を造営した。この王は仏教信者であったというが建立した寺院はヒンドゥー教の寺院のみで、特に国家の守護神シヴァの熱烈な信者であった。この王の治世(一〇一〇―一〇五〇)にアンコール王国の勢力はモン族の曾ての中心地であったメナム Menam 河流域のロンブリ Lopburi にまで伸展し、また国

内的にはトンレ・サップ湖の西部地域の開発が進んだ。

スールヤヴァルマンのあとに、ウダヤーディティヤヴァルマン Udayadityavarman (一〇五〇―一〇六六)が王位に即き、「王のリング」を祀るバプーオン Baphuon をピメアナカスの南側に建立した。さらに、恐らくは都城の人口の増加からヤシヨーダラ・タターカ(東バライ)の水量の絶対の不足をきたしたためと考えられるが、都の西に長さ八キロメートル・幅二キロメートルに及ぶ巨大な貯水池を築いた。これが今日の西バライである。今日、アンコールの地図を見て、スールヤヴァルマンの建立したピメアナカス寺院、ウダヤーディティヤヴァルマンの前記の二つの造営工事のあとを検討してみると、曾てヤシヨーヴァルマン一世の計画したヤシヨーダラ・プラの設計が変更され、第二次ヤシヨーダラ・プラが新しく造営されるに至ったことが知られる。すなわち、プノム・バケンを都城の中心とする案が変更されて、第一次ヤシヨーダラ・プラの北辺を新都城の中央の東西に通ずる道路とし、プノム・バケンの東側に新都城の北大門から南大門を通じて南北に貫く都大路が造られたことが歴

然としているからである。第二次ヤショーダラープラは北大門と南大門を結ぶ線を東西の中心とするほぼ三キロメートル四方となり、第一次に比べて規模が少し小さくされたことが知られる。⁽³⁾

ウダヤーディティヤヴァアルマン二世の治世におこった国内の反乱と、そのあとに起こったチャムパー Campa との抗争は必然的にアンコール王国の弱体化をもたらしたが、この間に王国の北部に根拠をもつマヒーダラ Mahidhara 王家が擡頭してきて、一〇八〇年にジャヤヴァアルマン六世（一〇八〇—一〇七）としてアンコール王国に登場した。そして、一一一三年に至って、その甥のスールヤヴァアルマン二世が即位すると、約半世紀にわたったアンコール王国の不安定な状態は漸く落着きを取り戻した。この王の治世は近隣諸国との争いに忙殺された時期であったが、結局は東はチャムパー王国から西はパガン Pagan 朝のビルマまで、北はモン族のハリブンジャヤ Haribunjaya 王国（現在タイのランブン Lamphun）から南はマライ半島のグラヒ Grahi に至るまで領土を拡張し、その勢力は広大な範囲に及び、アンコール王国の最

盛期とされる。

スールヤヴァアルマン二世の数多い造営事業の中で最も偉大なものはアンコール・ワットの建立である。アンコール・ワットは第二次ヤショーダラープラの外城の部分で南北に通ずる都大路の東側に建立されたが、この建造物にはやはりリンガを祀る段台ではなく、ヴィシュヌ神をデーヴァラージヤの象徴とする寺院であることは明らかである。スールヤヴァアルマンの死後に、アンコール・ワットは王の霊廟となり、王はパラマ・ヴィシュヌ・ローカ Parama-visnu-loka 「ヴィシュヌ世界に登った者」の名で祀られた。

スールヤヴァアルマン二世は一一四五年のあと、なんら知られない。一一五〇年以後、アンコール王国内に何度か内乱があり、また国内の混乱に乗じて一一七七年にはチャムパーの水軍が河を遡って進撃し、ヤショーダラープラを占領した。これらの内憂外患のアンコール王国の危機を救ったのは、マヒーダラ王家の血をひくジャヤヴァアルマン七世で、四年にわたってチャムパーの侵入を駆逐し、漸く一一八一年に即位した。まず、一一九〇年に

戦いを挑んできたチャムパー王を敗走させ、一二〇三年から一二二〇年にかけてチャムパーをカンボジアの一部として併合した。ジャヤヴァアルマン七世は、その四十年にわたる治世（一二一八—一二二八）の間に、外征面では北はラオスの現在のヴィエンチャン地方にまで支配をのびし、西はメナム河下流域地域からパガン王朝のビルマ国境まで、またマライ半島の北部にまで、その勢力が及んだ。また、内政でも、彼は注目すべき偉大な事業を完成した。国内に百二の病院を建て、百二十一の宿駅を設けて王都から地方に至る各道路に配置した。さらに、一一八六年には母の追善供養のためにタ・プロム Ta Prohm 寺を、ついで一一九一年には父の冥福を祈るためにプラ・カン Pra Khan 寺を造営し、そのほかネアク・ペアン Neak Pean 寺院、バンテアイ・クディ Banteay Kdei 寺院、バンテアイ・チヌマル Banteay Chmar 寺院などを建立したが、その中でも最も偉大な建造物はアンコール・トム Angkor Thom の中心に建造されたバヨン Bayon である。アンコール・トムすなわち第二次ヤショーダラープラの中心にあつてデーヴァラージヤの

象徴を祀る寺院であるが、塔の四面に微笑を浮かべたローケーシュヴァラ Lokeshvara 「世自在」の巨大な顔の彫刻で飾った。ローケーシュヴァラは北伝の仏教における観世音菩薩の後代のインドにおける姿であり、シヴァ神信仰と観音信仰の習合を示すものである。仏教信者としてマハー・パラマ・サウガタ Mahāparamasugata 「偉大にして最高の仏教信者」という諡号をおくられたジャヤヴァアルマン七世が、仏教信者としてアンコール王国の王権のシンボルであるシヴァ神と仏教信仰との総合を具体化するために、バヨンの塔の壁面をローケーシュヴァラの顔で飾ったと見るのは、考え過ぎであろうか。ジャヤヴァアルマン七世は一二一八年に死歿し、そのあとアンコール王国にその子孫が数代にわたって君臨したが、昔日の面影は全くなかった。十四世紀から十五世紀にかけてタイ族の大規模な侵入を受け、遂に一四三二年にはアンコールの首都を放棄するの止むなきに至った。

四

以上、第二節にアンコール・ワットの結構を比較的に

詳細に記述し、第三節においてはカンボジアの歴史を王と建造物とを中心に略述したのは、アンコール・ワットの謎を解くために必要と考えたからである。それでは、その謎とは何か。

まず第一に、アンコール・ワットは何故に西向きになっているかということである。アンコール時代の建造物はすべて東向きである。アンコール・トム(第二次ヤシードラ・プラ)におけるバプ・オン・ピメアナカス・バヨンはいずれも東向きであり、第一次ヤシードラ・プラの中心プノム・バケンもそうである。また、城外の諸建造物いずれも東向きである。⁽⁴⁾これらの諸建造物が何故に東向きであるのか、その理由は未だ明らかにされていないが、アンコール・ワットのみ西向きであるのは不可解といわねばならぬ。筆者はアンコール時代の建造物がすべて東向きであることに對し、現在ある仮説を持っているが、未だ不十分なので、ここではこの東向きである事実を既定の事実として、その前提の下にアンコール・ワットの西向きの問題を考えてみたい。

第三節に記したように、ヤシードラ・アルマン一世(八

の訳である。ウダヤー・ディティヤヴァアルマンはまた西バライを構築したが、この東側は第一次ヤシードラ・プラの西側の線に一致する。これは恐らく先代のスールヤヴァアルマン一世の時代、いなそれ以前のラー・ジェーンドラヴァアルマンの時代から、恐らくは第二次ヤシードラ・プラの構想以前から、既に建造中であつたことを意味しよう。

さて、ここから問題が展開する。歴史的に、東バライのあとに西バライが築かれたことは疑いえない。とすれば、アンコール・ワットは第二次ヤシードラ・プラの南北を通ずる都大路の東側に建立された東寺であり東大寺であつたと考えられよう。では、何故に第二次ヤシードラ・プラの城外に建立されたのか。それは、ヴィシュヌ神を祀る寺院であつたからであると考えられる。アンコール王国の王権のシンボルはリングであり、シヴァ神信仰を基調とするデーヴァ・ラー・ジャ「神王」の思想がアンコール王国の国家宗教の中核であつたからである。パラマ・ヴィシュヌローカの諡号をおくられたほどにヴィシュヌ神を信仰し、みずからヴィシュヌ神の権

八九一九一〇)がプノム・バケンを中心とする新しい都城ヤシードラ・プラの建設に着手した。そして、その予定地の東側に、幅二キロメートル・長さ七キロメートルという人造湖ヤシードラ・タターカを築いた。約五十年後、恐らくはこのタターカの竣工を記念してであるが、ラー・ジェーンドラヴァアルマン二世はこのタターカの中心に「王のリング」であるラー・ジェーンドラ・シユヴァ・アラ・リングを祀る寺院(東メボン)を造営した。さらに、都城の東・タターカの南にバドレー・シユヴァ・アラ・リングを祀るプレ・ルプ寺院を建立した。こうして都城の東側が整備されたのであるが、約半世紀後にスールヤヴァアルマン一世(一〇二〇—一〇五〇)はヤシードラ・プラの最初の計画の外側にピメアナカスを造営し、さらにウダヤー・ディティヤヴァアルマン(一〇五〇—一〇六六)は王のリングを祀るバプ・オンをその南側に建立した。この前を南北に通ずる道路は、そのまま南下すれば、当初の計画で都城の中心であつたプノム・バケンの東側に達する。そして、この道路を都大路とした第二次計画が三キロメートル四方の新都城のちのアンコール・トムとな

化とさえ自負していたスールヤヴァアルマンも、ヴィシュヌ神の祠堂を既にシヴァ・リングの祀られた第二次ヤシードラ・プラの内部に敢て造営して、アンコール王国の伝統ある信仰に逆らうことはできなかったのではないかと考えられる。そして、都城の外城に思いきり広い土地を選んで、と言つて第一次ヤシードラ・プラの東側の濠を越えることはできないで、その東の濠と都大路の間にまず「東寺」として、ヴィシュヌ神を祀るアンコール・ワットすなわち「都城の寺院」を建立したのである。その名は明らかにスールヤヴァアルマン二世の意図を現わすものであり、その心の中には「西寺」を建立する意図があつたであろうと思われる。しかし、アンコール・ワットそのものの造営の終らないうちに、スールヤヴァアルマン二世は死歿した。アンコール・ワットは「都城の寺院」として東寺であるが故に西を向いているのである。スールヤヴァアルマン二世の願いの満たされないうちに、王国は乱れ、「西寺」の建立される前にジャヤヴァアルマン七世が即位し、仏教信者として、アンコール王国の伝統を無視することができず、仏教とシヴァ信仰の習

合したローケーシヴアラをもつてきて、アンコール・トムを中心であるバヨンの塔を飾ったことが考えられる。そのうち、アンコール王国に昔日の栄光と繁栄はなく、アンコール・ワット西寺は遂にそのうちも建立されなかったというのが実状であろう。現在のアンコール・ワットは東寺であり東大寺であったが故に、都大路に面する西側を正門とし、西向きになっているのである。

次に、アンコール・ワットの第二の謎は、今日アンコール・ワットの第一回廊の浮彫を見る人は、時計の針とは反対の方向にまわるといふ問題である。これは、アンコール・ワットが寺院か墓かという問題と関聯があり、若干の説明を必要としよう。十三世紀にこの地を訪れた中国の周達観は、アンコール・ワットを「魯般の墓」と記す。魯般とはスールヤヴァルマン二世のカンボジア語名の写音であろう。爾来、伝説も交えてアンコール・ワットは墓とされ、その故に西を向いているという説明もなされた。一九一一年にセデスは回廊の浮彫を詳細に検討して、それが本質的にヴィシヌ信仰の性格があり、従つてアンコール・ワットは元来ヴィシヌ寺院

であると論じた⁽⁵⁾。この説はわれわれを十分に納得させるものであったが、一九三三年に至つてプシルスキが異論を唱え、この建造物を寺と呼ぶことに反対し、これは原初的には墓であつて寺院ではないと主張した⁽⁶⁾。その主張の根拠は、ヒンドゥーの宗教儀礼で礼拝の対象を常に左手に見て行列が左から右に動く場合はプラサヴァ *Prasava* といひ、墓の場合にもそのように行なわれる。寺院においては、行列は反対の方向（すなわち時計の針の進む方向）に動き、プラダクシナ *Pradakshina* 「右邊」を行なう。アンコール・ワットの第一回廊の浮彫を視る場合、一般に人はプラサヴァを行なう。従つて、この建造物はもともと墳墓として造営されたものである、という

にあつた。プシルスキは、一九三七年にこの問題を蒸しかえし、アンコール・ワットは王城から離れていて、アンコール・トム⁽⁷⁾の東南にあるのは、死者は生きている者と一緒に住んではならず、南東の方角は死者の領域にあるからである。アンコール・ワットの正門は西の方角にあり、これは沈む太陽の方向である。アンコール・ワットの回廊の浮彫はプラサヴァの方向に並んでおり、アン

コール・ワットが寺院であつたとすれば、浮彫はプラダクシナの方角でなければならないであろう、と主張したのである。⁽⁷⁾これに対し、セデスは反論し、それぞれの壁面で浮彫が左から右に進んでいるのは彫刻師の便宜によるもので、正確に左右相称的な型に従つて並べられているのではない。この建造物の葬送的な性格は認めるとしても、建築や装飾は明らかに寺院であることを示しており、そこには神が祀られていて、王は生前に既に神と同一視されていたであろうとし、「墳墓寺院」という語を用いるよう示唆した。⁽⁸⁾この語は既にオランダの考古学者

きであるということのみであり、最初からその祠堂の中に神と見做された王の像をかくまうように予定されていた、という結論に達した。そして、中央にある偶像が王の死体もしくは骨灰の上に置かれて祀られるというタイプの建物は墳墓寺院というよりほかに言いあらわし方がない、という。⁽¹¹⁾

ボス F.D.K. Bosch が提唱し、フィノ L. Finot が賛意を表していたところである。⁽¹⁰⁾セデスはさらにジャヤヴァルマン七世の治世の大建造物を調査して、死んだ王の棺として用いられたと思われる石の容れものを発見し、今日プノンペンやバンコクで見られるように火葬のあとに骨灰を収めたものであるとし、当時カンボジアと同じくヒンドゥー文化の影響を受けていたジャワおよびバリの寺院の葬送に關連あることを検討し、アンコール・ワットは墳墓ではあるが、建造物と異なるのは、それが西向

キリスト教徒でないわれわれにとつて、セデスの意見も当然すぎるほどのことで、何を取り立てて論議するのが不思議なほどであろう。アンコール・ワットが寺院か墳墓かを論ずるよりも、すなわちアンコール・ワットがスールヤヴァルマン二世の墳墓であり、この王を祀る寺院であることは明確な事実として、先に進むことにしよう。アンコール・ワットがヴィシヌ信仰と關聯のあることは、セデスの論じた通りであり、その根拠は第一回廊に繰り上げられる八種の壁面の描くところにある。われわれは、もう一度その描くところを繰り返すことにする。すなわち、

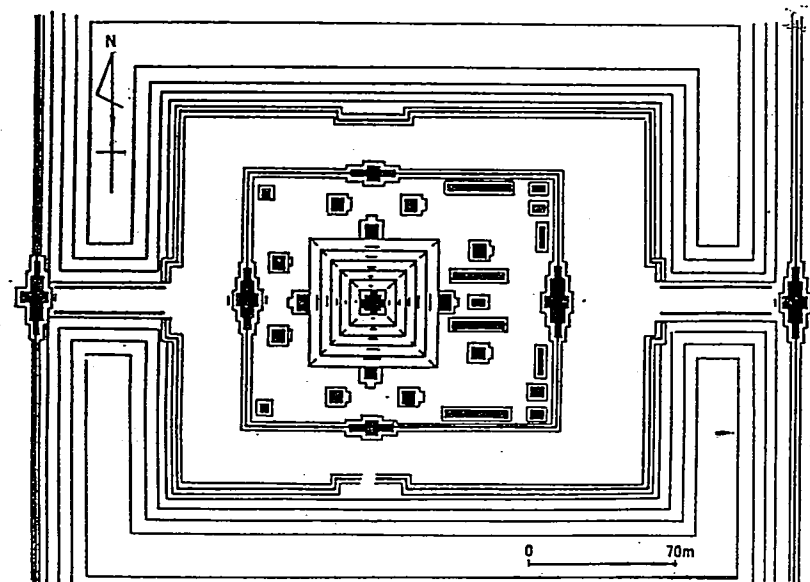
WS 『マハーバーラタ』のバラタ戦争。
SW スールヤヴァルマン二世。

SE 極楽と地獄。
 ES 乳海攪拌。
 EN ヴィシヌヌ神とアスラとの戦い。
 NE クリシユナとバーナとの戦い。
 NW クリシユナとカーラネーミとの戦い。
 WN 『ラーマヤナ』のランカー島の戦い。
 となる。この順に見たとき、壁面に描かれた浮彫には
 ならん連絡が認められないことは、だれしも了解するで
 ある。「アンコール=ワットの浮彫はプラサヴァの方
 向に並んでいる」とシルスキは言うが、浮彫の画面を
 どのように解釈しての所説か、理解に苦しむところであ
 る。ボスは、浮彫を東・北・西・南の順に見るとき、あ
 る関連性が認められるという。その関連性とは、セデス
 の所論を引き合いに出すまでもなく、ヴィシヌヌ神信仰
 であることは、ヒンドゥー教の初歩の知識のある者にと
 って容易に理解されよう。
 さて、ここでヒンドゥー教の初歩の知識とは、ヴィシ
 ヌヌ神のダシャ・アヴァターラ Daśa-avatāra 「十種の
 権化」のことである。周知のように、ヴィシヌヌ神はヒ
 うに猿軍の味方あり。
 NW われには、カーラネーミをクリシユナが殺した
 ときのように諸神の味方あり。
 NE われはアスラのバーナを征伐するクリシユナで
 ある。
 EN われはガルダ鳥にまたがってアスラの軍勢を迎
 えうつヴィシヌヌである。
 ES かくして、アスラを従えたわれは、その協力を
 えて、またハヌマンに鼓舞されて、国土を建設
 した。
 SE われの統治する国は正に天国であり、われに従
 わざる者は地獄の苦しみを受けよう。(「極楽と
 地獄」は政治的プロパガンダの譬喩として用い
 られたと考えられる)
 SW かく申すわれはスールヤヴァルマンである。わ
 が麾下の大軍団の威風堂々たるを見よ。
 WS かくて、戦わんとすれば、曾てアルジュナを鼓
 舞激励したクリシユナの声のように、天の声が
 あつて、敵軍を立ちどころに征服しよう。(勝

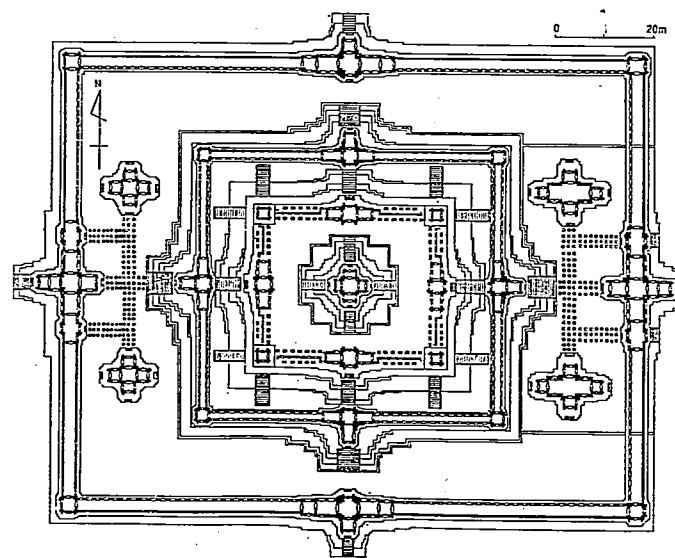
ンドゥー教の三大神の一であり、世界救済の目的で十種
 に姿を変え、この世に顕現するとされる。すなわち、
 (一)魚(マツヤ)。(二)亀(クールマ)。(三)野猪(サ
 アラーハ)。(四)人獅子。(五)矮人(ヴァーマナ)。
 (六)パラシュラーマ。(七)ラーマ。(八)クリシ
 ナ。(九)ブッダ。(一〇)カルキ。
 の十種である。アンコール=ワットでは、この中で(七)
 と(八)のみの姿が見られるが、ヒンドゥー教ではこの二
 者が最も人気のある権化であるからである。もう一つこ
 こに考えねばならないことはESの「乳海攪拌」の神話
 の解釈である。この神話は『マハーバーラタ』にも『ラ
 ーマヤナ』にもプラナ文獻にも見えるが、これは創
 造神話であり、そこに海があらゆるものの起源であるこ
 とを寓意し、且つハヌマンが登場していることを考える
 と、この神話は国土建設の譬喩として、この壁面に描か
 れたと考えるのが当然と思われる。かくして、アンコー
 ル=ワット第一回廊の浮彫はWNから始めて、次のよう
 に解釈されよう。
 WN われには、ラーマが魔王ラーヴァナを倒したよ

利をうるバーンダヴァ軍が右に、敗退するカウ
 ラヴァ軍が左に描かれているのは、この浮彫を
 見る方向に極めて示唆的である)
 このように見るとき、全壁面の浮彫は一連のものとな
 り、それぞれの壁面の表現するところも一段と意味の重
 いものとなる。そして、このように見て廻ることこ
 そ、アンコール=ワットを真に理解するものというべき
 である。この廻り方、すなわち礼拝の対象を常に右側に
 しながら(時計の針の進む方向に)まわるのが、インド古
 来のプラダクシナ(右遷)である。なお、プラサヴァは
 葬送の儀礼であつて、墳墓に対する儀礼でないことを知
 るべきである。
 アンコール=ワットの第三の特徴は、その建造物複合
 の形である。アンコール=ワット以前の時代における建
 造物は、八八二年のバコン以後、十一世紀後半のバプ
 ーオンに至るまでピラミッド型段台で、一般にシカラ
 (Silakha) 建築といわれる。⁽¹⁵⁾シカラとは梵語で「頂」を意
 味し、しかもシヴァ神に関して用いられる。すなわち、
 シヴァ神はカイラーサ=シカラ=ヴァーシン Kaiāsa-

sikharavasin 「カイラーサ山の頂に住む者」とかカイラーサ=シャイレンドラ=シカラ=ステイタ *Ishtasikharavasin* 「カイラーサという山の王者の頂に居る者」といわれ、従ってアンコール時代のシカラ型の各建造物はまさしくシヴァ=リンガの安置処として当然の場処であったといわねばならぬ。従って、カイラーサ山の麓にあるマーナサ湖にならって、それぞれの建造物の近くにタターカ（人造の貯水池）が掘削されたのである。ところが、アンコール=ワットに至って一応シカラ建築に倣って段台になっているが、その上に塔が九つあって、従来の建造物に対して一変している。これは何を意味するか。シヴァ神からヴィシュヌ神に変わったためと言っても、塔の「九」という数が説明されない。筆者は、ここに結論のみを言えば、ヴィシュヌ神信仰の擡頭とともに古くからインドに伝承されたスメール（須弥）山の九山八海の神話が復活したと考える。ヒンドウ教において世界の中心とされるスメール山は、プラーナ文献の若干に見られるだけで、その後は姿を消し、そののちはメーラ山とカイラーサ山の名が登場する。この場



バヨン



プラーオン

合、スメールとメーラはヒンドウ教では同じであるが、仏教徒の間では異なることを忘れてはならぬ。なお、この問題に関して、アンコール=ワットの浮彫は同時的な描写で、絵巻物のように時間的でもなく、パノラマ的でもないこと、そしてインド人の描写法は同時的であることを考えると、アンコール=ワットの形がインド人技術者によるものであると結論してもよさそうである。アンコール=ワットのバヨンはその形状を模倣したものであるが、ただカンボジア人技術者の手になっただけに人物像にアンコール=ワットとは異なる点が認められると考えられよう。

註

- (1) アンコール=ワット Angkor Wat は「都城」を意味するサンスクリット語ナガラ nagara の転訛形 angkor とタイ語・カンボジア語で「寺院」を意味する vat（ただし、発音はワット）との複合語。従って、「都城の寺院」を意味する。サンスクリット語・タイ語・カンボジア語、そしてフランス語には W 音がないので vat と書く。Angkor Wat は英語での綴である。

- (2) Brugs, L.P.: The Ancient Khmer Empire, Ameri-

- can Philosophical Society, 1951; Cœdès, G.: The Making of South East Asia. London 1966; MAUMDAR, R.C.: Kamboja-deśa or Ancient Hindu Colony in Cambodia, Madras 1944.
- (80) GROSJURER, B. Ph.: La cité hydraulique angkorienne, exploitation ou surexploitation du sol, BEFFO 66 (1979), Cartes 3—6 及 Yāsodharapura 地図など、なだりて記述しつゝ、その略やなりを、なだりて略すゝるべきを断せざる。
- (4) 横田源次『トハノローマ・ロム』東京、昭49、一七三頁—一八〇頁。
- (5) Cœdès, G.: Les bas-reliefs d'Angkor Vat, Bulletin de la Commission Archéologique Indochinoise, 2, 170—220. (Briggs, op. cit. p. 204)
- (6) Przyuski, J.: Pradakṣiṇa et prasava en Indochine, Festschrift Moriz WINTERNITZ zum 70sten Geburtstag, Leipzig 1933, 326—332.
- (7) Przyuski, J.: Is Angkor-Wat a Temple or a Tomb? Journal of Indian Society of Oriental Art, 5 (1937) 131—144. (Briggs, op. cit. p. 204)
- (8) Cœdès, J.: Les grands monuments d'Angkor, sont-ils des temples ou des tombeaux? Cahiers de EFEO 26 (1941) 29—31. (Briggs, op. cit. p. 204)
- (9) Bosch, F.D.K.: Le temple d'Angkor Wat, BEFFO 32 (1932) 7—21.
- (11) FINOT, L.: Le temple d'Angkor Vat, Part 1. L'architecture du monument, Paris 1929, Introduction 5—36. (Briggs, op. cit. p. 204)
- (11) Cœdès, G.: Angkor, an Introduction, Translated and edited by E.F.G. ARDNER. Singapore 1963, pp. 34—38 [IV] Temples or Tombs.
- (12) Bosch, op. cit. p. 12.
- (13) WALKER, B.; Hindu World, sul Viṣṇu (Vol. 2, p. 575); 『梵道四篇著作集』第三卷、一五三—一五三頁。
- (14) STUTLEY, M. and J.: Harper's Dictionary of Hinduism, New York 1977, sub. voc
- (15) インド美術史と、なだりてヒンドゥー教のシヴァ建築の起源は、所載の、その Bhīrargaon とその祖型を、見るゝるゝる、(s. WILLIAMS, J.G.: The Art of Gupta India, Princeton 1982, p. 85) 爾後シヴァの進行の発展と、なだりて、インド各地に巨大な建造物の出現したことが知られる。特に、南型は、ヒンドゥー形と何層とも積み重ねた多層の建築の形を、なだりて、(上掲照夫『インド美術史論考』東京、昭49、三四〇—三四一頁)。
- (16) 岸本『経典繪巻の源流を探究す』『日本絵巻物全集』52 (昭45)、五八一—七三頁。

(ふなやま ひとし・創価大学特任教授)